

## 東洋絵画会

第二回内国絵画共進会が開かれた明治十七年の秋には日本画界にもう一つの重要な出来事があった。それは東洋絵画会の発足である。同会は日本画各派を擁し、農商務省官僚の肝煎りで発足したもので、会長は農商務大輔品川弥二郎（天保十四年～明治三十三年）、副会長は野村素介（号素軒。天保十三年～昭和二年）であった。会員数は非常に多く、中には橋本雅邦や川端玉章なども名を連ねており、また、フェノロサも名誉会員の中に加えられている。『東洋絵画叢誌』（明治十七年九月創刊）は同会の機関誌である。同会の最大の事業は毎年一回開く絵画共進会であった。第一回は明治十九年秋に開かれたが、それは単にさきの内国絵画共進会の民営版とも言うべきもので、これと違って新味は無かった。ただ注目しておきたいことは、規約の中に、

第五條 本會ハ叢誌發賣ノ利益有志者ノ醵金ヲ以テ畫學校設立ノ資本ニ充ツ

第十二條 醵集金額一萬圓以上ニ達スルハ畫學校設立ニ着手ス可シ

という条項を設け、画学校設立に積極的姿勢を示していたことである。計画の内容を推し測るすべは無いが、同会の性格からみて恐らく前述のワグネルの提案を具体化することが主旨だったと考えられ

る。ただし、この計画は遅々として進まず、岡倉やフェノロサの官立美術学校設立運動に押されて立ち消えとなったようである。

## 鑑画会

『美術真説』によって日本画復興の方法を説き、大きな反響を呼び起こすとともに一躍有名になったフェノロサは、やがて鑑画会を拠点として独自の復興構想を実践に移すことになった。そもそも鑑画会というのはモースに心服していた刀剣商町田平吉が発案したもので、町田がフェノロサと相談して明治十七年二月に「和漢ノ事歴品格ニ関スル真理ノ講究」を目的とするクラブを結成したのがその始まりであった。当初は町田が会主をつとめ、活動の中心を新古画（文人画以外の各派日本画）の鑑定に置いていた。初会は同年三月九日、両國中村楼で開かれ、その後は各所で一週間おきに開かれたが、その際には狩野永恵、山名貫義、狩野友信、および永恵に狩野永探理信（マサシ）の名号を許されたフェノロサが鑑定委員となって持ち込ま



河瀬 秀治

（『河瀬秀治先生伝』より転載）

れた絵を鑑定し、可とするものには全委員連署の鑑定状を交付した。また、毎回フェノロサやビゲロウが蒐集した古画を系統的に展示し、フェノロサが講演を行った。しかし、